

略 歴

汪 牧耘 (おう まきうん / WANG Muyun)

東京大学東アジア藝文書院特任助教。中国貴州省生まれ。2018 年法政大学大学院国際文化研究科修士課程修了(国際文化)。2022 年東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程修了(国際協力学)。東京大学東洋文化研究所特任研究員を経て、2024 年 4 月より現職。都留文科大学、国際基督教大学非常勤講師。専門は開発学、対外援助研究。「より良い生」をめぐる感覚、記憶や言説の知識化に関心があり、中国や日本、そして東南アジアをフィールドとして、国際開発の学問的な系譜をドキュメント分析と現地調査から浮き彫りにすることを試みている。

主要著書・論文

第一、開発学の構築をめぐる試行錯誤:「特集『国際開発学における日本の境位を探る:越境者のオートエスノグラフィーを方法として』について」「結びにかえて:多遍世界を共生する国際開発学」(共著)、(『国際開発研究』33(2)、2024 年)、「中国における国際開発研究の受容と展開:脱『欧米中心主義』の可能性の一考察」(『アジア経済』64(3)、2023 年)、“Imagining Pluriversal Development Knowledge Production Via Japan as Method”(共著)(*The Semantics of Development in Asia: Exploring ‘Untranslatable’ Ideas Through Japan*, Jin Sato and Soyeun Kim (eds.), Springer, 2024 年)、“Development Knowledge in the Making: The Case of Japan, South Korea and China”(共著)(*Progress in Development Studies* 23(3)、2023 年)など。

第二、特定の開発言説の分析:「『より良い生』と共生の相克を超えて:『人民日報』の肉食言説に基づく問題提起」(『ともに成り行く道、ともに花する世界』、柳幹康編、東アジア藝文書院、2024 年)、「中国からみる日本の開発協力大綱:文献レビューに基づく視点の沿革と現状の分析」(『国際開発研究』33(1)、2024 年)、“Parallaxes in the Developmental Experience in Asia: How the ‘Saemaul Undong’ is Reviewed in South Korea, Japan, and China”(共著)(*Journal of International Development Studies* 32(2)、2024 年)、“The Trinity of Aid, Trade, and Investment: The Reemergence of a Japanese-Style Development Term as China Rises.”(*The Semantics of Development in Asia: Exploring ‘Untranslatable’ Ideas Through Japan*, Jin Sato and Soyeun Kim (eds.), Springer, 2024 年)、「『開発=开发(カイファー)』の意味変容と概念形成:日中における言葉の借用を中心として」(『国際開発研究』29(1)、2020 年)など。

第三、開発事業の現地調査:“Exploring Common Space of Valuation: A Case Study on the Changing Historical Narratives of Shimenkan Village”(History and Theory of Common Spaces, Yuki Tanaka(ed.), East Asian Academy for New Liberal Arts, 2024 年)、「減貧経験輸出的困境と挑戦:対援老项目的中期考察」(中国語)(『中国農業大学学报』37(6)、2020 年)、「『生き物』としての開発協力:中国貴州省にみる世界銀行と事業の現地化」(『国際協力と想像力』、松本悟・佐藤仁編、日本評論社、2021 年)、「中国・石門坎の観光資源化プロセス:政府と諸アクターの相互作用に着目して」(『白山人類学』22、2019 年)など。